

# 文春図書館

## 今週の必読

綿矢りさ「ウォーク・イン・クローゼット」  
ヴァネッサ・テイト「不思議の国のアリス」の家

## 著者は語る

川上未映子「あこがれ」

## ミステリーレビュー

「ボンコツ探偵の名推理」[うそつき、うそつき]

## 漫画の時間

「よつばと！」

## ベストセラー解剖

「ゼロ・トク・ワン 君はゼロから何を生み出せるか」

## 電話の向う側

「ルボ コールセンター」

## 新刊推薦文

「お母さん二人いてもいいかな?」

「井田真木子と女子プロレスの時代」

「エンビツ戦記」他

## 私の読書日記 立花 隆

「柳原白蓮の生涯」「図説“特殊性欲”大百科」

「ダレス兄弟」「習近平の権力闘争」他

## 文庫本を狙え!

「逃亡日記」

## 今週の必読

# 『ウォーク・イン・クローゼット』

小洒落た雰囲気、油断すると、いつの間にか毒の味

## 綿矢りさ

### 【評者】阿部公彦

著者二年ぶりの新刊。タイトルは小洒落た雰囲気だが、収められた二篇はなかなかえぐい話題を扱う。ストーリーカーとパラッチ。綿矢りさという作家がつねに世間の注目を集め、ある種の熱狂さえ引き起こしてきただけに、この設定に単なる「フィクション」を超える

た事情を読む人もいるかもしれない。さて、それは間違っているのか。「いなか、の、すとーかー」の主人公は若いイケメン陶芸家。精神疾患とおぼしき女性のつきまといに遭い、友人の助けをえて撃退を試みるのだが、実はより悪質な別の犯人がいるとわ

かる。さらにラスト近くでは、真犯人と偽犯人が妙な

タッグ。コメディなのかグロイのかわからないこの事件を通し、主人公はあらためて作品を「発信」するこ

との危険な魔力について考える。純朴な目の主人公が苦境を乗り越え成長するというプロットは綿矢作品では珍しいものではないが、面白なのは、そんな牧歌的な成長譚への毒の混入具合

である。人物たちのちょっとした科白、やけに鋭い観察の目などに「おや?」と思う。主人公の見るものが世界のすべてとは思えないのだ。何だか不穏なのだ。

おそらく物語は、はじめから軌みを抱えている。「いい人」に見える登場人物も別の人格を隠し持って

いる。表題作の「ウォーク・イン・クローゼット」では服へのこだわりが中心テーマにすえられる。男たちの視線を気にし、見かけに磨きをかける主人公の早希は、やがて上滑りの関係に疲れ果て自分を見失いそうになる。そんなとき、芸能界で働く幼馴染みのだりあが、妊娠してマスコミにパラッチされているのがわかる。早希はだりあを救出

するため、その影武者役として漫画チックな装いに身を包むのだが、それが彼女を何かに目覚めさせる。ここにもやっぱり純朴な目。でも、それだけか。早希という女、ほんとうに純朴なだけなのか。

秘密を解く鍵は、人物たちの「対関係」にある。「い



講談社 1400円+税

わたやりさ/1984年京都府生まれ。2001年「インストール」で文藝賞を受賞し、デビュー。04年「蹴りたい背中」で芥川賞受賞。12年「かわいそうだね?」で大江健三郎賞受賞。「勝手にふるえてろ」「しょうがの味は熱い」「償死」「大地のゲーム」など著書多数。